

科学研究費助成事業（基盤研究（S））研究進捗評価

課題番号	24223002	研究期間	平成24年度～平成28年度
研究課題名	社会的障害の経済理論・実証研究	研究代表者 (所属・職) (平成30年3月現在)	松井 彰彦（東京大学・大学院経済学研究科（経済学部）・教授）

【平成27年度 研究進捗評価結果】

評価	評価基準
A+	当初目標を超える研究の進展があり、期待以上の成果が見込まれる
A	当初目標に向けて順調に研究が進展しており、期待どおりの成果が見込まれる
○ A-	当初目標に向けて概ね順調に研究が進展しており、一定の成果が見込まれるが、一部に遅れ等が認められるため、今後努力が必要である
B	当初目標に対して研究が遅れており、今後一層の努力が必要である
C	当初目標より研究が遅れ、研究成果が見込まれないため、研究経費の減額又は研究の中止が適当である

（意見等）

研究の進捗状況については、概ね順調であるが、理論と実証との相互の研究連携が今一つである。研究代表者及びゲーム論の理論家の連携研究者の理論研究は、国際的にも高い評価を得ているが、他の分野での研究成果が必ずしも国際的に高く評価されるレベルには達していない。研究者間の研究上の連携をより強めることにより、本プロジェクト全体の進展を期待する。なお、障害者追跡調査やそのデータに基づく研究には遅れが見られるので、この点には留意が必要である。また、E-Learning を用いた大学進学分析が他の社会的障害の研究分野とどう関わるのか不透明な面も見受けられる。

【平成30年度 検証結果】

検証結果	当初目標に対し、概ね期待どおりの成果があったが、一部十分ではなかった。
A-	本研究は、ゲーム理論に基づいたモデルによって障害者、長期疾病者、児童養護対象児童、被災地の傷病者・児童等の「ふつう」でない人々が直面する社会的障害を統一的に読み解き、そのモデルを実証分析の俎上に乗せ、問題解決の糸口を探ることを目的としており、研究代表者を中心に国際学術誌掲載論文など一定の成果を上げている。また社会的障害に関わるゲーム理論による理論モデル構築についても成果が認められる。さらに、東日本大震災を受けて社会的障害を研究対象に加えたことも評価できる。
	しかし、障害、長期疾病、児童、被災地の各調査結果をモデル理論によって解釈した上で、当初研究計画調書にある「『ふつう』の人々が直面する社会のゆがみをあぶり出し、経済学そのものの方向性を変えようとする」という研究目的を達成するには、まだ十分な成果が発表されていないように見える。研究成果報告書記載の大学における障害学生受け入れに関する論文も、まだ未定稿と記載されており、今後さらなる研究成果の発表を期待する。